

『障がい児の防災を考えるアンケート』 集計結果から

2011. 8, 8

1 アンケートについての反省点（事務局）

- (1) メールを送信ミスで、全体会後の連絡が届いていない学校があったり、後になって、集計方法を変更したりするなど、各校担当者の皆さんにご迷惑、ご苦勞をおかけしました。
- (2) 連絡、確認が遅かったために、アンケートを実施できなかつたり、独自に集計し、グラフ化への変更等の余裕を持てなかつたりした学校もありました。
- (3) 質問内容の吟味が不十分で、特に 2 の「災害時の連絡方法について」と 3 の「災害時、ご家族の行った行動について」は、集計し難い回答が多かつたようです。連絡方法は、電話をかけた側なのか、受けた側なのかの混乱もあつたように思います。（保護者が対象でしたので、学校から受けた電話、家庭からかけた電話は？という質問でした。）
- (4) 大まかな年齢別の人数を集計する必要もあつたと思います。コミュニケーション能力や災害時の本人から家族への連絡についてなど、年齢による差も大きいと思います。

2 アンケート集計結果について

(1) お子さんのコミュニケーション能力

・「はい」という回答が 50%を越えたのは「名前」。次いで、学校名。「自宅の住所」、「電話番号」は約 30%。「助けてほしい事柄」も、どの程度の内容なのかを示すべきだつたと思いますが 30%を越えました。日常から、電話番号や住所が言えることや困つた時の報告などの訓練が必要と感じました。

(2) 災害時の連絡方法について

- ・「学校からご家庭への連絡方法」は、携帯が 51%、固定電話が 16%でした。携帯電話では、メールよりも電話で連絡を取つたケースが 74%と多かつたようです。緊急連絡の一斉メール配信というシステムがあれば、結果は違つてくつと思います。
- ・「家庭から学校への連絡方法」で携帯が 45%というのは、地震の起きた時刻が平日（週末）の日中（仕事中 or 迎えや帰りの途中）だつたということで、時間帯など条件によつて変わつと思います。
- ・「本人から家族への連絡方法」からは、携帯電話を持たないお子さんの単独帰宅途中の連絡方法が課題として見えてきたと思います。
- ・「災害伝言ダイヤル」利用は 5%と思つたよりも少なかつたです。沿岸地域では電話の利用ができなかつたことに加え、内陸では使い方の周知不足のためでしょうか。
- ・「災害時有効な連絡手段」は、沿岸と内陸では状況が大きく違つてしまいました。携帯だのみというのは共通だつたと思います。停電でも充電できる備えが必要です。

(3) 災害時にご家族の行った行動について

- ・全体の集計にまとめないでしまいましたが、沿岸ではお子さんと家族の方が会えるまでに 1 週間、或いは、20 日以上というケースや車が無く、徒歩で何時間もかけて迎えに行つたというケースがあ

りました。学校を避難所にといい思いはここからも伺えます。

(4) 防災マニュアルの周知について

- ・「地域の避難場所を知らない」が81%。お家の方も知らないというのも少なくないのでは。
- ・「地域の防災訓練に参加」は10%。今後は増えると予想されます。
- ・「学校からの避難場所や緊急連絡方法を知らない」が58%。周知を進めたい事柄です。
- ・「非常持ち出し品の準備」をしているは29%。最低、停電への備えが必要と思います。

(5) 家庭でできることについて

- ・「サポートブック」を作っているが14%。今回のアンケートで、「知らなかったが欲しい」、「持たせたい」、「作って欲しい」という声がありました。
- ・非常持ち出し「特別品」を入れているが12%。特別品は、薬、アレルギー食などの医療関係品、オムツ、着替えなど生活用品、玩具、ゲーム、CDプレーヤーなどのお気に入りグッズの他、防音用ヘッドホン、会話補助装置などもありました。準備されていなかった方も、今後のことを考え、お子さんの特別品を考えてくださったようです。
- ・「お泊まり体験がある」が79%。宿泊学習、修学旅行を除いた体験として質問した方が良かったと思います。一般の方々と一緒ということ考えると不安は大きいと思います。
- ・「防災館などでの体験がある」が12%。経験の積み重ねが大事だと思いますので、学校でも積極的に校外学習などの計画に取り入れることを検討してほしいと思います。
- ・「要援護者申請をしている」は6%。制度の周知不十分の表れですが、登録していても何もしてもらえなかったという現実もあり、市町村や地域による対応の差が大きいかもしれません。沢山の方々が登録することで、制度も充実すると考えられます。

(6) サポートブックについて

- ・「知っている」が25%、「作っている」は、前述（「家庭でできること」）のとおり14%。
- ・「あれば良いと思う内容」は、多い順に、「連絡先」、「障がい名」、「身の回りのこと」、「気をつけてほしいこと」、「障がい特性」、「コミュニケーション」、「医療機関」、「薬」、……でした。複数回答可としたので、全部の項目に○をつけた方も多かったです。選択数を限定した方がより必要度が分かる結果を得られたかもしれません。

(7) 望むことについて

[同行者に]

- ・まず、不安を取り除くことと安全確保。障がい理解や体調管理、そして、食料など生活介助と保護者や学校への連絡を求めるとご意見が多かったです。

[避難先に]

- ・一般の方々とは別の環境とプライバシーの確保やトイレについての要望、視覚的な表示の工夫など、環境についての声が多く寄せられました。専門的知識のある支援者の配置も大事です。
- ・行動面に不安があり、周囲への気遣いから避難所に入れないと考えている方が多く、福祉避難所の増設、学校を避難所にといい切実な思いを感じました。

[学校に]

- ・学校を避難所にするという意見が多数ありました。
- ・避難訓練の内容や回数の見直し、緊急連絡方法の周知、食料、発電機など緊急時への備えを求める意見のほか、地域への啓蒙や災害時にマスコミを利用するなど、スピーディで広汎な情報提供の工夫をとるという意見もありました。

[地域・社会に]

- ・障がいの理解が第一です。障がい者や高齢者など、弱者の防災、避難についての具体的な計画の推進と「困ったら助けを呼ぶこと」が自然にできる社会が望まれます。
- ・「自分たちできること」として、普段からのご近所づきあいや家族で防災について話し合うことの大切さなどにも気づいたという意見がありました。
- ・地域のリーダーの方々に障がいについての理解や意識を高めていただき、要支援者の状況把握と必要な支援をとるという意見や共生社会の実現のため、マスコミや大きな団体のPRが必要という意見もありました。